文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2019年度　第１回「研究発表交流会」

シンポジウム
文学の可能性
―震災・移動・記憶―

報告書

主　催

大阪市立大学 OSAKA CITY UNIVERSITY　国立大学法人 大阪教育大学　和歌山大学　SEKISUI HOUSE 積水ハウス株式会社

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2019年度　第1回「研究発表交流会」

シンポジウム 文学の可能性 ―震災・移動・記憶―

地震をはじめとする災害と、それにかかわる人間のあり方について、文学および人文学研究の立場から考えます。文学の素材としての災害、災害による人間の身体および心の〈移動〉や変化、語り部や鎮魂・追悼のイベントなどに代表される〈記憶〉の紡ぎ方などについて、文学の可能性をさぐります。

2019年 7.24 水

13:30～16:35

参加費無料

場所 大阪市立大学　杉本キャンパス
学術情報総合センター1階　文化交流室

対象 連携機関所属の教職員・学生・一般

定員 80名　事前申込み
※同時通訳あり

第1部　基調講演 13:30～

「文学の可能性：3.11の記憶とこうの史代のマンガ『日の鳥』」
Linda M.Flores（オックスフォード大学 准教授）

第2部　Kobe・Tohokuから発信される「語り」 14:30～

「瓦礫を越えて」（朗読パフォーマンス）
玉川侑香（詩人）

第3部　報告とパネルディスカッション 15:15～

報告①
「〈震災文学〉さまざま
―芥川龍之介・川端康成から東野圭吾・宮部みゆきまで―」
奥野久美子
（大阪市立大学大学院 文学研究科 言語文化学専攻 准教授）

報告②
「日本文学と〈鎮魂〉―戦後の文芸文化を中心に」
堀まどか
（大阪市立大学大学院 文学研究科 文化構想学専攻 准教授）

報告③
「震災とキオクカタリ
―個人とコミュニティの回復の手がかりとして―」
西岡英子
（大阪市立大学 女性研究者支援室プログラムディレクター、特任准教授）

パネルディスカッション
パネリスト
Linda M. Flores、玉川侑香、奥野久美子、堀まどか
Robert Tierney（イリノイ大学 世界比較文学学科 教授）
司会　西岡英子

Linda M.Flores

**オックスフォード大学
東洋学部教務ディレクター
日本語学 准教授**

同大学ペンブローク・カレッジ副学部長、日本語チュートリアルフェロー。
カリフォルニア大学LA校東アジア言語文化学の博士号取得。
最近の出版や研究プロジェクトでは、「3.11作品のなかのインター・テクスチュアリィ」や、こうの史代のマンガをはじめ、「3.11後の文学（震災後文学）」などをテーマとしている。
現在、「3.11後の文学（震災後文学）」（仮題）の編集中。

講演者プロフィール

玉川　侑香

**詩人・エッセイスト
地域の「まち案内人」**

阪神淡路大震災を語り継ぐ活動の中で、震災を越えて生きる人々をモデルに詩を書き朗読する。
著書に、震災を語り継ぐ絵本三部作（『四丁目の「まさ」』、『ミヨちゃん』、『安っさん』）、詩集「かなしみ祭り」、エッセー集「れんが小路の足音」他。
2006年、ロドニー賞（神戸の市民賞）。
2016年、詩集「戦争を食らう」で第45回壺井繁治賞・日本自費出版文化賞受賞。
2018年、神戸市文化活動功労賞受賞。

申込み方法

下記の内容を記載の上、大阪市立大学女性研究者支援室までメールにてお申込みください。
①氏名（ふりがな）②所属・学年（教員の場合は職位）③日中連絡可能な電話番号を記載し、件名を「7/24 交流会参加」としてください。
※当日参加もしていただけますが、できるだけ事前にお申込みください。

託児無料
事前申込み：7/10（水）締切り
※託児利用希望者は 子どもの①氏名、②年齢、③希望時間を女性研究者支援室までメールでお知らせください。

［お申込み・お問合せ］　大阪市立大学女性研究者支援室　Tel：06-6605-3661
〒558-8585　大阪市住吉区杉本 3-3-138
E-mail: ocu-support-f@ado.osaka-cu.ac.jp　HP:http://www.wlb.osaka-cu.ac.jp/

［主　催］　大阪市立大学 OSAKA CITY UNIVERSITY　国立大学法人 大阪教育大学　国立大学法人 和歌山大学　SEKISUI HOUSE 積水ハウス株式会社

目　次

開会挨拶 …… 1

大阪教育大学 学長補佐　土山　和久

Ⅰ．基調講演 …… 2

「文学の可能性：3.11 の記憶とこうの史代のマンガ『日の鳥』」

オックスフォード大学 准教授　Linda M.Flores

Ⅱ．Kobe・Tohoku から発信される「語り」 …… 5

「瓦礫を越えて」（朗読パフォーマンス）

詩人　玉川　侑香

Ⅲ．報告とパネルディスカッション …… 9

報告①　「〈震災文学〉さまざま ―芥川龍之介・川端康成から東野圭吾・宮部みゆきまで―」

大阪市立大学大学院 文学研究科 言語文化学専攻 准教授　奥野　久美子

報告②　「日本文学と〈鎮魂〉―戦後の文芸文化を中心に」

大阪市立大学大学院 文学研究科 文化構想学専攻 准教授　堀まどか

報告③　「震災とキオクカタリ　―個人とコミュニティの回復の手がかりとして―」

大阪市立大学 女性研究者支援室プログラムディレクター、特任准教授　西岡　英子

パネルディスカッション

【パネリスト】

Linda M.Flores、玉川　侑香、奥野　久美子、堀　まどか、土山　和久

イリノイ大学 世界比較文学学科 教授　Robert Tierney

【司会】　西岡　英子

閉会挨拶 …… 16

大阪市立大学 男女共同参画担当 副学長　池上　知子

シンポジウム

「文学の可能性 ―震災・移動・記憶―」

開会挨拶

大阪教育大学 学長補佐　**土山　和久**

皆様、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。大阪市立大学、大阪教育大学、和歌山大学、積水ハウス株式会社は、文部科学省の科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」に採択されました。本日のシンポジウム「文学の可能性」は、本年度で３年目を迎える同事業の一環として行われており、「女性研究者の国際的リーダーを育成する」ことと「海外との共同研究の推進を目指す」ことを主な目的としています。

本日のシンポジウムは、「文学の可能性」をテーマとして、地震などの災害と、そこに関わる人間のあり方について、文学が果たす役割や使命などについて、文学を研究する立場や人文学を研究する立場から探求するというものです。文学の「素材」としての災害、災害による人間の身体や心の変化や、語り部や鎮魂、追悼イベントなどに代表される「記憶のつむぎ方」など、あらゆる視点から文学の可能性を考える貴重な取り組みです。

文学といえば、あらゆる時代のあらゆる国、世界中で書かれた文学に、私たちは共鳴や感動をします。このことから、文学には、時代や国を超えて、人と人をつないでゆくことができると言っても過言ではないような普遍的要素があるように思います。

このような普遍的要素を持っている文学を「可能性」というテーマで見る場合、「面白い」「楽しい。楽しむ」といったことも一つの可能性といえるでしょう。さらに、私たちの人生の支えになることや生き方を考える、そういったものを教えてくれるといったさまざまな可能性もあるでしょう。

１万キロ以上の距離を超えて来てくださった、オックスフォード大学東洋学部長日本語学准教授のリンダ・フローレス先生の基調講演をはじめ、さまざまな方々のお話を傾聴した後、パネルディスカッションでは、自由に感想やご意見をお聞かせいただければと思います。そして、共に文学の可能性について考えを深め、参加された皆さまの今後の研究や取り組みの一助となることを願っています。

I 基調講演

「文学の可能性：3.11 の記憶とこうの史代のマンガ『日の鳥』」

オックスフォード大学 東洋学部教務ディレクター 日本語学 准教授　**リンダ・フローレス**

本日は、素晴らしいシンポジウムに招待いただき、ありがとうございます。

私は、こうの史代の「日の鳥」という漫画を題材にして話をします。3.11 の後、主人公のおんどりが、沿岸の陸前高田や釜石、立入禁止区域の福島や南相馬などの被災地を旅して、行方不明となった妻を捜すシリーズものの漫画です。3.11 を風化させないことを示唆する作品といえますが、この話をする前提として、マイケル・ロスバーグの「Multidirectional Memory」、「多方向的記憶」の理論を用いて見ていきたいと思います。

震災後の記憶の風化とともにある復興

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災、津波、福島第一原子力発電所の事故の 3 つの災害の後、被災地の人々は「日本と世界はこの災害を記憶に留めるべきだ」と考え、マスコミなどは「3.11、福島、東北を風化させない」と訴えました。ところが、ドイツの記憶研究である学者アライダ・アスマンの書物「Active Memory と Passive Memory」には、忘れることは人間の自然なプロセスであり、記憶するには努力が必要と書かれています。

2011 年から数年後、日本の大手書店が震災記念日に 3.11 コーナーを特設し、震災関連の書籍を集めました。しかし、数カ月もすると東京の書店から 3.11 コーナーは消え、書籍チェルノブイリ、神戸大震災などの非常に小さなコーナーにおさめられました。一方、東北の書店では、3.11 コーナーは非常に広く、3.11 関連の書籍が目立つように並べられており、釜石の書店の 3.11 コーナーでは「一番怖いのは風化すること」と伝えていました。風化とは忘れることです。

災害後の記憶の風化とともにあるもの。それが復興です。現在、被災地の復興は続き、荒廃した土地に仮設住宅が建ち、その後、本格的な建物が建設されています。瓦礫の除去、インフラ整備など、程度の差こそあれ被災地は復興しつつあります。

「日の鳥」主人公の「努力」と「行為」の意味

津波で壊滅的な被害を受けた岩手県釜石市は、人口約 3 万 4,000 人の街です。この街に 1 万 6,000 人収容の「釜石復興スタジアム」を建設し、2019 年秋にラグビーワールドカップを開催します。また、日本全国で 2020 年に開催される東京オリンピックの準備にも余念がありません。つまり、地元も日本も、震災から離れて前に進んでおり、オリンピックフィーバーの中で 3.11 が忘れ去られる懸念があります。だからこそ、今、記憶と復興の問題がクローズアップされなければならないのです。

では、私たちは、どのように 3.11 を記憶すべきなのでしょうか。道徳的方法はあるのでしょうか。約 10 年たった今でも、被災者を追悼し続けるとはどういうことなのでしょう。記憶は薄れていくのでしょうか。記憶には一定の容量しかないのでしょうか。新しい記憶で、古い記憶はあふれ出てしまうのでしょうか。

「集合的記憶は、不動産開発のようなものであり、有限の容量を記憶が取り合う」とする「競合的記憶論」があります。マイケル・ロスバーグは「Multidirectional Memory（多方向的記憶）」で、「集合的記憶は、資源のゼロサム論に対して記憶を多

方向的なものへと理解するべきである」として、「集合的記憶は、継続的折衝、ネゴシエーション、相互参照、借用が可能な生産的なものであり、欠如的なものではない。記憶は、現在、発生しているものであり、記憶するには努力と行動が必要である」と記しています。

「日の鳥」シリーズは、主人公のおんどりが、旅をしながら復興の中で思い出を語るという「努力」と「行為」を描くことで、記憶が今に生きていることを表現しています。文章は、３つの災害「地震」「津波」「福島」の原発事故の記憶が複雑に絡み合っているネゴシエーションを現しており、「日の鳥」を読むと、災害の３つの要素が混然一体となっている様を想起させます。

3.11 を競合的記憶のモデルで捉えると、災害の記憶が談話の中で目立つように対立し合い、暴力を思わせます。一方、ロスバーグの「多方向的記憶モデル」は、3.11 に関する集合的記憶を折衝する道徳的モデルを提案しています。そこで、この漫画シリーズが、競合的記憶の「暴力」に抵抗し、「3.11 の暴力を可視化しているか」をテーマに、①おんどりが妻の不在を語ることで実在化と現在化しているか。②「日の鳥２」の特別書きおろしで、放射能という目に見えない暴力を原子力の物語を通してどのように表現しているかという２点に焦点を当てて見ていきます。

「パラテキスト」で紡がれた「日の鳥」

私が、「日の鳥」を読んだのは、集合的記憶論で提唱されている道徳的難問に対する答えを見出そうと思ったからです。「日の鳥」は、3.11 後の出来事を、旅日記、旅絵日記、視覚的物語、歴史ドキュメタンタリー、ポエム、散文、手紙など、さまざまな手段で表現しています。今までにないスタイルの漫画「日の鳥」は、ジャロード・ジャネットのいう「パラテキスト」という手法、文章を構成する要素がその理解に影響を及ぼし、意味を植えつける手法で制作されています。目次、災害や復興の統計情報、著者のメモ、地図、巻末の引用リスト、そして、第２巻の最後には「日の鳥２」の特別書きおろしがあり、第１回第２巻と特別書き下ろしまでのすべてが相互作用し、読者に深い影響を与えます。パラテキストで紡がれた「日の鳥」は、フィクション「物語」と、ノンフィクション「厳然たる統計データ」を併せ持つ漫画となったのです。

テキストの最初には目次があります。おんどりが妻を捜す旅で訪れた町の名前と、震災後の経過の時間を記載しています。そして各章で、被災地の特定の場所が描かれるのですが、各章の最初のページに日本地図があり、その場所の位置を示します。名産物に関する手書きの注釈や災害の統計データ、震度、津波の高さ、死者、失われた家屋や建物の被害、そして復興の情報が載っています。

また、おんどり以外の視点、例えば、おんどりが耳にした会話なども描かれています。「今日の食事」というコラムには、おんどりの食事の絵と説明があり、作者の注釈もあります。さらに作者が震災後二、三カ月おきに訪れた被災地で撮った写真をもとに描いたスケッチもあります。作者は、このような方法で災害の影響と復興の進捗状況の両方を記録しています。妻を捜すおんどりにとって、「3.11 の前と後の場所」「妻といた時間といなくなってからの時間」の２つが存在していることもわかります。また、物語のあらゆる部分が、「災害」と「震災」と「復興のある側面」と「証言」で構成され、複合体をつくっています。これは、震災を表現する方法は１つだけではない、記憶する方法も１つではないことを示唆しています。

主人公であるおんどりは、自分自身を「妻を捜し求めているおんどり」と紹介しており、アイデンティティーと妻を捜し求めることは切っても切れないこ

とを示唆しています。おんどりは、空を飛び、地面をついばみ、夜明けにコケコッコーと鳴き、草や植物、人間の残飯を食べるという動物的特徴を持ちながら文章では擬人化され、妻がいなくなったことを身を切るような感覚でとらえ、妻とのやりとりの記憶を持ち続け、一緒に旅をした場所を覚えていて感傷的になり郷愁を抱きます。そんなおんどりは、復興のこと、特に交通機関の復興に注意を払います。震災による破壊について触れる一方で、日々の日常生活が再開されているのを見つけて安心します。例えば、列車が走っていたり、信号が直っていたり、道路が通じているのを見るとほっとする。文章の中でおんどりは仲介者として機能しているのです。おんどりは、3.11の前後をつなぐ。そして妻とともにある存在と妻なしの存在をつなげています。時間的、空間的極限を埋めているおんどりはまた、場所やその伝統を継ぐ人たちのように、文芸の過去と現在の橋渡しをしている存在でもあります。

おんどりがかなりの注意を向けているテーマに旅行と交通機関があります。3.11により交通がいかに分断されたかを指摘しており、ここから被災地と東京の空間の橋渡しをしていることもわかります。おんどりは、過去と現在の記憶をリンクさせています。その方法として、現在の妻の物語を語り、思い出を語ることで妻の思い出を閉め出そうと迫る記憶の暴力に対して抵抗を押し進めていくのです。

「小さな世界」が示唆するもの

ここで、「ゆっくりとした暴力」(slow violence)について考えたいと思います。時間のかかる暴力である、見えない放射能を、「日の鳥」ではどのように見せているのでしょうか。その答えは、「日の鳥２」の最後の「小さな世界」にあります。ここでは、核融合やウランがセシウムの放射性同位体であり、セシウム137になる過程を絵と手紙で物語にしています。この手紙はウラン原子の視点で語られています。この部分は手書きの絵と文字、そして最初と最後の漫画で構成されています。羽の絵から始まります。恐らく前のページに描かれた、主人公のおんどりの羽でしょう。羽は地面に落ち、テキストが「もっとよく見て」と促します。羽の中にミニチュアの手紙があり、ここで新しい主人公のウランが登場し、ウラン238がセシウム137になる旅。つまり、核分裂から原子力が、放射性同位体のセシウム137が生み出される物語が始まります。大きな不吉な黒い鳥が飛んできて原子力発電所の上にとまり、セシウム137が「ではいつか。きっといつかね」と語ります。サインは「ウラン238だったセシウム137より」。ここで暗示されているように、放射能は時間をかけてゆっくりと分解しています。

では、大きな不吉な黒い鳥は何でしょう。これが日の鳥でしょうか。どこにもいないけれどあらゆるところにいる「日の鳥」は、おんどりが探す妻で、不在だけれど存在する遍在性を持った存在なのです。

ロスバーグは、自身の著書「多方向的記憶」で、その目的を、「歴史的関連性を見出し、記憶のアーカイブや政治の知性を形づくる。部分的な重複や対立をあらわす道徳的見解を生み出すこと」としました。

「日の鳥」の試みから私たちが学ぶべきこと

これまでの考察を通じて、「日の鳥」は、さまざまなジャンルや視点を包含しており、記憶は回想的で置きかえられ、置き去りにされる恐れがあるとする競合的記憶モデルの暴力に抵抗を試みているといえます。ロスバーグの多方向的記憶のように、「日の鳥」は記憶が共有する境界線を見出し、集合的記憶である3.11を提示しています。ロスバーグは、集団が確立した立場を語るのみならず、互いの対話的交流を通して、実際に存在する影響されやすい推論的な空間であるとしています。

「日の鳥」では、どの視点も科学的、統計的、個人的、視覚的、あるいは著者の視点も物語で突出することはありません。むしろ、それらは一体となって災害、復興、そして失われたものの記憶を描写しており、読者に「3.11を風化させない方法は１つではない」ことを気づかせます。

このように「日の鳥」は災害の構成要素の相互関連性と共有された境界線に私たちの注意を向け、3.11の記憶の道徳律の可能性を提示しているのです。

Ⅱ Kobe・Tohoku から発信される「語り」

「瓦礫を越えて」（朗読パフォーマンス）

詩人・エッセイスト、地域の「まち案内人」 **玉川　侑香**

今から 24 年前、淡路を震源とした震度７の地震が阪神・淡路一帯を襲いました。当時の様子を、淡路島の漁師は「大きな地面が、波が割れて、陸地のほうへ向かっていった」と表現しています。高速道路を走っていた長距離トラックの運転手は「道路が向こうから波を打ってやってきた」と語っています。海の沖から陸地を見ていた船の船員は「突然、六甲山が真っ赤になった。その後、街の灯が一斉に消えた」と証言されました。街の中にいた方は「川底からサーチライトのように、光が真っすぐ天に向かって上った。その後、非常に大きな揺れが襲った」と語りました。

朝５時 46 分、私の家も震度７に襲われました。暗闇の中で起こった震度７の揺れは、今まで感じたことがないほど激しく、それが地震だとわかるのに数秒かかりました。その間、天井から、横から、ありとあらゆる物が降ってきました。６畳の部屋に寝ておりましたが、ふすまがあかない。かもいが落ちて、ふすまが開きません。閉じ込められたと思うと、恐怖を感じます。ふすまを破って外に出て、脱出口を開けるために玄関に出ましたが既に戸は動かないのでガラス戸を破って出る。やっと家から脱出した近所の人が裏の空き地に集まりした。ガスの臭いが立ち込めており「たばこを吸うな。ライターの火は使うな」とお互いに声を掛け合いました。足元には地割れが走り、石垣は崩れています。不安を抱えながらも暗闇の中で、安否確認のように１人ずつ互いの無事を確かめました。「○○さんがまだ出てない」ということで捜しに行くと、倒れたタンスの下でうめき声が聞こえてきて助け出しました。

ラジオもテレビも家の下に埋まっていたのでそのときはまだ、神戸や大阪、明石などがどうなっているのかが全くわかりません。誰かがつけたトランジスタラジオから、神戸地方震度４という情報が流れました。皆、不安に駆られていました。

やがて夜明けが近づいてきました。西の空から煙が上がってきます。どこか燃えとん違う。火事やわ。火の元を確かめるために、入れない家へ帰る人もいました。息子や娘たちの友達が避難してきました。私の家は屋根瓦が全部落ちていましたが、家の形は残っていたので避難所になりました。

そうこうしている間にも、私たちは埋まった人を救助したり、水をもらいに走り、冷蔵庫の中から食料を見つけたり、いろんなことをして過ごしました。突然、非日常の世界が日常の中に割り込んでくると、人間の精神は日常生活を継続しようとするのでしょう、「うちの主人、朝会社に行こう思うて、この壊れた家の中からネクタイ締めて出ていきよんよ」という奥さんと御主人のけんかもありまし

た。でも、それが精神の平衡を保とうとする人間の性かもしれないと思いました。

でも、現実は非日常です。家はつぶれて、埋まっている人を助けに行かないといけません。大きなスコップものこぎりもない。でも、皆で埋まった人を助け出さなくてはと懸命なのと同時に、頭では「そろそろお昼やったら御飯の用意をせなあかんのん違うやろか」などと考えている。また、私は当時、布団屋をしており、震災が起きた日は布団の配達を頼まれていたので、「今日は配達できません」とお客さまに電話で連絡をとろうとしたりしていました。今思うと、非日常と現実との間を１日中行ったり来たりする不思議な日々でした。

アパートに住んでいた子供を助け出すドラマもありました。親子で潰れた梁の下敷きになり、お母さんは先に助け出され、子供のお腹の上に梁が乗っていました。皆で、梁を取り除くのに四苦八苦していたところに、元消防署職員の人がやって来ました。太いロープを車に積んでいたので、そのロープで子供を引きずり出して大急ぎで病院へ運んでいったのです。このことをモデルに書いた「ミヨちゃん」という詩があります。

言葉をなくした「ミヨちゃん」

ミヨちゃんには言葉がない。お父さんと子犬のポチが死んだ。あの日からミヨちゃんには言葉がない。ミヨちゃんの夏休みの宿題はいつもツバメの赤ちゃんの観察日記。きのう訪ねたら、ミヨちゃんの家は柱１本もない広っぱ。２つ目の夏は家がない。ミヨちゃんにもツバメにも。お母さんと弟とミヨちゃんは、今、日本海のそばのおばあちゃんの家にいる。北に海がある。神戸とは反対でおかしいけど、地震は海の向こうへ逃げていくんかな。そうやったらええな。ミヨちゃんは貝殻を集めている。地震の神戸から来ました。先生に紹介された日、ミヨちゃんはたくさんの鉛筆とノートをもらった。そう、よかったね。今夜も遅くなるけど、ごめんね。民宿で働くお母さんのかわりに、ミヨちゃんは弟の手を握って寝る。姉ちゃん、電気消したらあかんで。あの日から弟は暗闇が怖い。本当はミヨちゃんも怖い。夜中、足が痛いと弟が泣いた。柱に押し潰された足。叫び声を思い出してミヨちゃんは弟を抱きしめた。神戸の病院へ行こうか。神戸に仕事あるやろか。ツバメ帰ってきたやろか。お母さん、神戸へ帰ろう。ああ、ミヨちゃんがしゃべった。お母さん、神戸へ帰ろう。

コミュニティーと記憶

幼い子供たちは、自分のつらい思いを語る言葉がなくて、失語症になる子が出てきました。私が知っているモデルのミヨちゃんも、長野県へ保養に行き、神戸には帰ってきません。このようにして、いろんな形で被災地を離れていった人がいます。そして、私たちがいつも記憶しておきたい人がいます。震災って何だったんだろう。この大きな災害の中の被害って何だろう。人の心のこと、この町ってどんなだったのか。そういうことを伝えていくために、私たちが記憶を持ち続けて、記録していくことが大事なんだと思います。

震災直後、小学生の子供たちのところへ話をしに行ったことがあります。その小学生の子供たちが言うんです。「人を助けよう思ても力もないし、タンスものけられへんし、大きな柱なんかのけられへんし、どないしたら助けられるんやろ」と。すごいことを言ってくれたと感じ「誰にでもできること。でも、本当は難しいこと。何やと思う」と私が言うと、皆、首をかしげていました。「隣の家のお友達引っ越したよね。同じクラスのお友達も引っ越してしまったよね。そのお友達のことを忘れないで覚えといてね」と伝えました。子供たちは「それならできる！」と言ってくれました。私たちができること。でも、ちょっと難しいこと。それは記憶することなのです。

また、私たちの町は年数を経るうちに形を変えていきます。倒れた家は倒れても我が家でした。家というのはただの家じゃない。仮設住宅や復興住宅があるから大丈夫というのではない。家で暮らした物語が、家の中の引き出しにあるのです。特に東北の古い家には、100年、200年の代々の歴史があると思います。その人たちの歴史が埋まった家です。その家の歴史、その地方の歴史、土地の歴史、そういうものをすべて含めて、家であり、町であり、

村だと思います。

震災で家がなくなり、抽選であちこちに振り分けられて、コミュニティーがばらばらになり、突然、慣れない所へ引っ越しさせられました。神戸で暮らしていた人が、突然、京都へとなっても簡単に根を張れるものではない。私たちの命は、その土地で何年もかけて大きく息づいてきたものだからです。震災を通じて、自分の町がどんなに大事であるかということを教えられました。だから、私は今「まち案内人」という肩書きで活動しているのです。

大切な家や町を一瞬にして潰した震災から、私たちはどのように復興していくのか。人から押しつけられるものではなく、自分たちの力や自分たちがつくってきたコミュニティーで、もう一度やり直していく。そういう力を持って、行動することが一番大事なのではないかと思います。

記憶はまた、一瞬にして消えるものです。ある方が、マンションで被災し、頭を打って、自分の名前が思い出せないなど、記憶が怪しくなりました。仮設住宅に入所することになったけれど、自分のこともわからないし、全然周りも知らない人ばかり。４年半もの間､記憶障害で暮らしていたけれど、大好物の天ぷらを食べる機会があり、天ぷらを食べた瞬間､記憶が蘇ったというのです。人間の五感は、すごいと感動しました。

震災の後は、皆、不安で落ち込んでいます。ですが、被災した者同士が助け合います。そして、被災したからこそ元気をいただくことができる。そういう連鎖がいろいろありました。私たちは、元気を出し合いながら、助け合いながらやってきたんだと思います。

震災後のある日、私は友達を捜して新長田へ行きました。新長田は大火災が起こった地域で、町中が何日間も燃え続けました。本当に町全体が廃虚になった、灰になってしまった。そういうところでした。新長田に行ってみると、高速道路も橋桁も真っ黒で、町全体は何にもありませんでした。黒い柱があちこちに立っているだけ。友達を捜すのは諦めました。無事を祈りながら、焼け跡をぼんやりと歩いて帰ってきました。そんな中、焼け跡で作業をしている人があちこちにいました。焼け跡から物を掘り出している人。それから､いろんな砂をすくって、何か通しで砂をこしているような人たち。そういう人たちを横目で見ながら、私はぼんやりとその中を通って、その町を後にしてきました。

その後、実はそれが、遺族が遺骨を拾っていたんだということをテレビで知りました。その途端、私は罪の意識に襲われました。私は、その遺骨の埋まっている土を踏んできたのです。無神経に、何の祈りもなく、何のためらいもなく、そこを歩いてきたことにショックを受けました。そして、そのとき出会った、おばちゃんの話を重ね合わせながら１つの詩をつくりました。これはつくったというより、震災によって書かされたという詩です。「四丁目の「まさ」」です。

四丁目の「まさ」

とうとうわてもダンボールおばはんになってしもた。昼は風よけ。夜はこん中に入って寝るんや。近所の人が避難所へ来いいうけど､行かへん。いや、何も性悪されるからやあらへん。もうちょっと息子のそばにおるんや。ほれ、あの屋根の下と言うたかて、焼けてなんにもなくなってしもたけど、あの下に息子も嫁も孫も埋まったままやねん。ドーンいうて地面が鳴ったとたん家が飛び上がった。次にゴゴゴォォと揺れた時には暗闇の中で身動きできなんだ。天井が降ってきとったんや。「はよ出んかい！」息子の怒鳴る声がしてはりを支えてくれとったそのすき間からわて１人はい出したんや。その後ドドドーと家が崩れてしもた。目の前で家が崩れてしもたんや。何でわてだけ逃げたんやろ。息子が下敷きや！嫁も孫もこん中や！わては半狂乱になって、崩れた材木に埋まりながら、手でガレキをほじくっていった。そんなもんらちあかへんわな。どこかで火の手があがったんやろ。気がついたらあたり一面火の海やった。わてはもう逃げへんかった。そんなりわてももう燃えてもよかったんや。そやのに､「おばはんなにしとんねん！」どこの誰かわからへんけど、わての襟首引っつかんで逃げてくれた。靴が燃えてやっぱり熱いわ。焼け跡の灰をバケツですくて、手のひらの上で転がしてみるんや。指で押さえてつぶれるんが灰。白うに残るんが骨や。息子のな。

１日１回ボランティアの人がおにぎりとみそ汁を持ってきてくれる。心配せんでもわて死なしまへん。気が済むまでこないしたらもう一遍生きてみるわ。２回も助けられた命やさかい、また串カツ屋の店出すわ。そのときは、あんた食べに来てや。四丁目の「まさ」いうて尋ねてもろたらすぐわかる。

この方は、昔から４丁目で串カツ屋を営んできた方。「四丁目のまさはん」といえば誰でも知っている。けど現実は、もう何もない。誰もいない。家族もいない。でも「わては四丁目のまさ」というのがその方の誇り。生きざま。まささんが「自分が四丁目のまさや」という生きざまを失っていないから、灰の中から立ち上がることができたと思います。

私もいつも「神戸から来ました玉川です」と言います。どうしても自分の町のことを頭につけて表現しているのですが、自分の人生、生きざまを大切にして生きていくということではないかと思っています。

Ⅲ 報　告

報告①　「〈震災文学〉さまざま　―芥川龍之介・川端康成から東野圭吾・宮部みゆきまで―」

大阪市立大学大学院 文学研究科 言語文化学専攻 准教授　**奥野　久美子**

震災文学において、震災がどのように扱われてきたかについてお話しします。千葉一幹氏の『現代文学は震災の傷を癒やせるか』という著書の冒頭で、東日本大震災約５年後から震災を題材とした文学作品が続々と出版されたと書かれています。震災直後から５年という月日にどのような意味があるのかを考えながら、４人の作家の震災文学を見てみたいと思います。

一人目は芥川龍之介です。芥川は関東大震災を経験していますが、自分が生まれる１年前の明治 24 年に起きた濃尾大地震を題材にした「疑惑」を書きました。震災など究極の非常事態が人間の心に潜む怪物を呼び覚ますという物語で、震災を作品の中の設定として使っています。

川端康成には、関東大震災を題材にした「空に動く灯」があります。震災の避難所での男との出会いが主人公の少女を女にし、震災の不幸と被災から飛び立つ翼が自分の中にあることを気づかせたという話で、たくましく生きる若い女性の姿を描きました。

東野圭吾の「夢幻花」は、東日本大震災前に書かれ、震災後に原発問題を加えて書き直された作品。現在では存在しない黄色い朝顔が江戸時代に開発されたが、この花には幻覚作用があるため開発した家が代々、監視してきた。消えてなくならないのなら、誰かが責任を負い続けなければならない。黄色い朝顔とは、原子力発電を示唆しています。

宮部みゆきの「二重身（ドッペルゲンガー）」は、震災の前日に、私的な恨みからバイト先の店長を殺してしまった犯人が、大震災を利用して店長は東北に買い付けに行って行方不明だと周囲に説明して逃れようとするが、その嘘を解き明かすという話。芥川の「疑惑」と同様で、設定として震災を使っています。このような作品が、震災後数年経って出てくるのは、記憶の風化やショックの癒やしに必要な時間と関わりがあるのではと思います。

ハーバード大学元教授のジェイ・ルービン氏は、『ペンギン・ブックスが選んだ日本の名短篇 29』の後書きで、「原爆文学という名称をつけ、日本文学の中の特殊なカテゴリーとしてまとめてしまえば、メーンストリームから切り離し、都合よく避けることができる」としています。カテゴライズすると興味の有無、関係している、いないと逃げることができる。それは震災文学も同様です。カテゴライズして閉じ込めず、日本の文学のメーンストリームの一部として捉える姿勢が必要だと思います。

報告② 「日本文学と〈鎮魂〉 ―戦後の文芸文化を中心に」

大阪市立大学大学院 文学研究科 文化構想学専攻 准教授　**堀　まどか**

日本において、事故や災害や事件に関して記憶する、語り継ぐ、記録する、保存することは、同じことを繰り返さないために当然のこととして考え、「鎮魂」することを大切にしています。ところが、ある人類学者の調査によると、アフリカのある部族は災厄は決して語らない、繰り返されないために記憶しないのが当然の慣習なのだそうです。保存しないという文化があるのは面白いと思います。つまり、死者の祀り方は、生命観、死生観の問題でもあるのです。

本日は、加害と被害の問題がより色濃く複雑化してくる戦争（人災）の中でも特異な、敗戦後のシベリア抑留の体験の表現、記憶の扱い方から、文芸の持つ可能性と鎮魂について問題提起をしたいと思います。

「シベリア抑留」は日本人にとっては被害の記憶となるのですが、これは戦争捕虜であり、シベリアの収容所に送り込まれたのは日本人だけではありません。また戦争は、関わった時期や場所、軍隊での地位や階級により異なります。さらに各人の感受性、年齢が記憶に関わります。石原吉郎は、戦後の日本で愛され、今なお多数の本が出ているシベリア抑留経験をもつ詩人としてよく知られています。抽象的で哲学的な表現を用いた人で、時代を超えて読み継がれ始めているという意味で古典になりつつあると評価されています。一方、詩人鳴海英吉は少年の時代からプロレタリアの詩や演劇に触れて検挙されたことで従軍させられ、２年間のシベリア抑留体験をしました。彼は下級兵士の立場から、男たちの言葉のやりとりを使ってわかりやすく抑留者の現実を詩にしています。学生と一緒に読んでみると、石原吉郎よりも鳴海英吉の詩の方が心に刺さると言う者も多いです。「語り」を考えたとき、聞く側の働き、つまり沈黙や言霊に、あるいは象徴性や美に意識を傾けなければ成立せず、多くの経験や記憶は聞かれることなく消えていきます。

戦争を取り上げる場合、「戦後の文芸文化の中の象徴的な語り方への志向。高度な文学性、哲学的な思考。徹底的な自己批判」に注意を向ける必要があります。石原は自虐的なほどに徹底的に自己批判した人で、「加害性と被害性が融解していくところが非常に大事」と言っています。ただし、このような徹底的な自己批判の姿勢は、現代の戦争体験のない世代にとっては、接近するのが難しくなっています。

もう一つ、鳴海の作品に見られる具体的な人々の語りには、ナラティブの中の強さと迫力があります。このような語りはコミュニティーの愛国心を喚起させやすいということから、語りの力と国家との力学に注意を払わなければならないのではないかと提案してみたいと思います。文学の力。個々の人間からの発信。その視点を意識して読み、受け取り、記憶を伝達していく必要があるのではないでしょうか。

報告③ 「震災とキオクカタリ　―個人とコミュニティの回復の手がかりとして―」

大阪市立大学 女性研究者支援室 プログラムディレクター、特任准教授　**西岡　英子**

記憶とは生命であり、生ける集団によって担われる。記憶は絶えず変化、想起、忘却を繰り返す。そして、歴史とは常に問題をはらみ、また不完全であるが、もはや存在しないものの再構成で、記憶は現在の現象を現しており、歴史は過去を再編成したものと言われています。私は、それを「セルフドキュメンタリー」という手法で、生々しい現実を捉え、個人の真実を伝えるためにノンフィクションで、個人の体験を記録した映像、写真作品なども制作しています。

東日本大震災の死者は全体で1万 9,630 人、行方不明者は 2,569 人とされ、宮城県気仙沼市は浸水範囲内人口の 55%、同県本吉郡南三陸町は 80%です。気仙沼市は2人に1人、南三陸町は全体で 80%の人に浸水体験があるということで、これは同じ記憶（死者への悼みや生活基盤の喪失等）を共有し、日常生活を取り戻すために語り合うこともできることを現しています。このようなデータの見方があることをお伝えします。

私は神戸で震災の研究をしていた経験から、被災地から神戸に来て学んでもらう活動もしました。被災者同士だからこそわかり合えることがあり、次の事態も予測できます。今考えれば、これはさまざまな意味で効果的でした。そうした中、その後語り部として活躍する人も出てきました。

震災の２ヵ月後から被災者の体験の記録を始め、２年目には、被災地に写真家と行き、ポートレートを撮り、聞き取りを行いました。「子どもの死」というトラウマを抱える女性、コミュニティの再建を目指す地域リーダー、復興商店街をつくりたいと、すぐに神戸市長田区の復興商店街を視察した方など、約 30 名の体験を聞きました。

2011 年９月、紀伊半島水害で実家を山津波で流された方と一緒に、記憶を語り継ぐためのワークショップも行いました。皆で昔の話をしながら地理を思い出し、地図を作るのですが、記憶の継承と個々の回復のための方法の一例として紹介します。

2017 年に発行された「3.11 避難者の声」という本を紹介します。原発事故避難者の記憶の語りとして「避難という選択の正当性をめぐる苦悩」「聞き手の不在」などが分析的に書かれている貴重な本です。

震災後、大きく生活が変化する中で、皆、人生や生活再建のための権利について考えるなど、いろんな学びを得ていきます。そこでポイントとなるのは、多面的、多層的、具体的な人間の姿。被災者とはこういうものとイメージをつくりがちですが、一人一人さまざまであり、固定的な見方が被災者の実態「可視化」と回復を妨げます。ひとり暮らしの若者や障害を持った人、外国人もいる。多様な人たちが記憶を話し、それを理解し、記録する共同作業の継続により初めて、被災者に寄り添うことができるということを最後にお伝えして、私の話を終わらせていただきます。

パネルディスカッション

パネリスト

イリノイ大学 世界比較文学学科 教授	**ロバート・ティアニー**
大阪教育大学 学長補佐	**土山　和久**
オックスフォード大学 東洋学部務教ディレクター 日本語学 准教授	**リンダ・フローレス**
詩人	**玉川　侑香**
大阪市立大学大学院 文学研究科 言語文化学専攻 准教授	**奥野　久美子**
大阪市立大学大学院 文学研究科 文化構想学専攻 准教授	**堀　まどか**

司会

大阪市立大学 女性研究者支援室 プログラムディレクター、特任准教授	**西岡　英子**

○**西岡英子**　今回は「文学の可能性－震災、移動、記憶－」がテーマです。移動という言葉には、心の変化、住居の変化という意味も含まれており、多方向から話ができるようにという工夫の一つと捉えてください。

　災害で、衝撃的な不慮の事態に直面すると、それぞれに思いを描くわけです。ところが、その中には、国や時代を超えた「普遍的なメンタリティー」といえるものがある。個人的な体験や集団の記憶とともに、文学でいかにそれを伝えていくか。読者がそれをどう捉えるのか。そうした問題につい考えていきたいと思います。最初に、フローレス先生に各講演の感想や質問をお願いします。

○**リンダ・フローレス**　詩に感動しました。衝撃を受けたのは、毎日の生活が平常に戻らないという点です。どのようにしていつも通りに戻ったのか。子供がどのように平常を取り戻し、トラウマもある中、どのように将来に目を向けるようになれたのかを教えてください。

○**玉川侑香**　もとに戻るには、長い年月が必要だと思います。個人差はあると思いますが、震災前からのコミュニティーが存続していれば、心、町、平常の暮らしの復興にかかる時間も変わってくるのでしょうけれど。

○**土山和久**　「日の鳥」と玉川さんの詩は、ともに大災害を文学で語っているわけですが、２つの作品は語り口が全く違うと感じました。サブタイトルに「記憶」がありますが、それは表現者の記憶だけでなく、受け取る読者にどのように記憶をつくっていくのかという私たちに対する挑発を感じました。

　また、「日の鳥」の主人公おんどりは、日本においてはルースターの象徴で、３歩歩いたら全て忘れる存在です。そんなルースターが、登場人物になって、震災と復興を語る滑稽さもある。しかも飛べない。飛べない登場人物が語っていくというのは、私たちの目線と同じ、もしくはさらに低い目線で現実を見るという仕掛けも感じました。玉川さんのあの語りですが、玉川さんの心の叫びともいえる朗読があって、はじめて完結する語りだと思いました。鎮魂というより、力強く生きていく人間を救うという記憶が、私の頭の中に残っています。本日、さまざまな文学が紹介された中で、一番記憶に残ったものを会場の方に聞かせていただきたいのですが。

○**参加者１**　私自身は阪神・淡路大震災が起こった年に生まれており、体験していません。高校の先生の体験談で、自分の家族が焼けていくのに自分だけ逃げるというのがありました。玉川さんの話と詩を聞いて、本当にあったんだと実感し、心に残りました。

○**参加者２**　先ほど西岡さんに紹介していただいた絵を描いた者です。私も被災経験があり、いろんな伝え方の話を聞かせていただいて、対話しながら似顔絵を描き、その人個人の経験を聞くことで震災が自分の中の物語になると感じています。

○**西岡英子**　ティアニー先生は、関東大震災について書いた作家、佐藤春夫の研究をされています。佐藤春夫の作品の中に、人災について書かれているとのことですが、お話しいただけますか。

○**ロバート・ティアニー**　私は、佐藤春夫の「魔鳥」を翻訳いたしました。この作品が中央公論に発表されたのは1923年の震災の１カ月後でした。舞台は台湾です。台湾の先住民は、この鳥を見るとすぐ死ぬと信じていました。また、人々は、この鳥は誰かを殺すつもりでやって来ると認識していました。特に災害の際、例えば感染症、あるいは洪水のときに多くの人が亡くなるわけです。この鳥がやって来たから死ぬということに関連づけています。物語は、物語の中の物語、あるいは二重になっているストーリーです。アレゴリーといわれるもので、１人の人の物語を、もう一つの物語を語るために使う。佐藤はこの作品を通じて、東京大震災の後、情報が断絶されて誤った噂が流れて朝鮮人大虐殺が行われ、アナーキストのリーダーも虐殺されたことを示唆しているのです。また、彼はこの物語の中で、「これは非常に残酷な先住民に起こったことだけれども、文明社会でも起こり得る」と言っています。

○**堀まどか**　アレゴリーで語っても、読み取れる人には読み取れたと思います。ところが時間が経つと、後世の者には見えなくなるかもしれません。そこを研究者は、伝えていくことができるのではと思います。文学は、１つの象徴的なものを用いて「普遍」的にしたり、読み手を過去の記憶に戻したりできるところが面白いと思います。

○**奥野久美子**　堀先生のシベリア抑留のお話で、シベリアから帰ってきた人たちが紙類、記録類を持ち帰ることができないので、シベリアで亡くなった友人の遺書を友達同士何人かで記憶して、日本に帰って家族に伝えたという話がありました。そ

して、記憶だけに頼って、遺族に遺書を伝えるというあり方が、文学としてとらえられるのではと。

○**堀まどか**　記憶して持ち帰って伝えなくてはと。それは彼らの使命で、生きる力にもなったと思います。またそれを聞いた人々がどれだけ感動したかというのも本当にはかり知れない、インパクトのある物語です。

○**西岡英子**　ここで、記憶の継承について考えてみたいと思います。フローレス先生は、おざなりにされている記憶があり、そのような記憶が継承されていない状況に対して抵抗していく必要があり、記憶を構築するために努力が必要と述べられました。記憶の継承のために、日本文学の分野では、どのようにすべきかを語っていただきたいと思います。

○**リンダ・フローレス**　原爆文学、あるいはホロコーストが想起されます。マーク・ウィリアムズ、あるいはデイビッド・ストールの著書で、戦争を再構築するというものがあります。デイビッド・ストールは、彼自身がホロコーストを経験しており、その上で原爆の教育について語っており、広島、長崎の原爆について、誰が語る権利があるのか、誰が伝えることができるのかと言っています。私が3.11の文学について研究を始めたときには、3.11文学が存在するのか否かもわかりませんでした。日本の大学の先生の大半は、自分は被災者ではないので3.11について研究したくない。被災者でなければ書く権利がないとおっしゃいました。原爆についても同様です。原爆について書く権利を持っているのは誰なのか。神戸震災について誰が書けるのか。どの災害についても同じです。時間が経てば経つほど我々は、ますますこの災害から離れてしまう。ホロコーストからも離れてしまう。神戸震災からも離れてしまう。おんどりが忘れやすいのと同じように、記憶はあせていってしまう。この災害について語る権利を持っているのが誰か、書く権利を持っているのが誰かという問題ではなく、我々市民として、人として、等しくこれを読む責任がある。そしてこれについて考えて、この歴史を伝え、物語を伝えていく必要がある。それが文学にできることだと思います。玉川さんの詩を聞き、本当に心を打たれました。彼女の経験に心を打たれたのです。玉川さんの経験を感じることができたのです。また、3.11の後、アジア研究の会議でドキュメンタリー映画についての議論がありました。ノンフィクションやドキュメンタリーフィルムだけが適切な媒体として災害を伝えることができるという議論でした。けれども、和合亮一の詩があり、少しずついろいろな小説が書かれ、詩が書かれ、こういった震災後文学というカテゴリーが形成されるようになりました。私は、学者あるいは象牙の塔にいる学者、つまりオックスフォード大学、神戸大学、大阪大学、イリノイ大学の先生たちだけに任せるのではなく、我々地域社会のメンバーとして、グローバルのメンバーとして、これについて考え、協力の精神でお互いをさらに深く理解をしていくということ―これが重要であり、これが文学の力だと思います。

○**玉川侑香**　震災であれ、戦争であれ、人の命がなくなる。命が奪われるというそこのところをどう向き合うかということだと思います。経験者にしか書けないことはありますが、自分の人生の中で本当に大切なものを失うという、その失うことの悲しみとその大きさとを人間として共感することができれば良いと思います。戦争のことも自分事として思いに引き寄せることもできます。

○**西岡英子**　土山先生は、日本語教育を専門にされており、学生に文学的体験を伝えておられます。若い方たちは、ＳＮＳで情報があふれている状態だと思いますが、どのように考えておられますか。

○**土山和久**　文学を今までに一度も読んだことがない人と、まともにコミュニケーションができるだろうかと思っています。何人かの方がリアリティーという言葉を使われました。実際に起こっているのだからリアルなのでしょうが、文学におけるリアリティーはそれとは違います。作者や語り手のさまざまな工夫があり、読者が感じるもので、それが文学の持つ美的エフェクト、あるいはエステーティックエフェクトです。そこに反応するのは読者サイドの問題でもあるわけで、そこに作家の苦心、工夫があると思います。また、何も

特別な文学だけが私たちの物語体験を活性化するのではなく、基本的に衝撃がないと記憶に残らない。衝撃が残ったものだけが次の人に語られていくのです。

○**西岡英子**　最後に皆さんからお一人ずつ一言、お願いしたいと思います。

○**ロバート・ティアニー**　記憶を語る際、必ずしも何が起こったかを記憶するだけでなく、最も重要なのは「どのように感じたのか」ということではないかと思います。どのように我々は捉えたのか、見たのか、そして把握したのかということだと思います。哲学者は、経験したことしかわからないと言っています。これが、誰か経験していないと、震災を経験した人じゃないと書けないということにつながっているのかもしれません。ですが、人間はそれほど単純ではありません。我々には想像力があります。それがあるからこそ、感じることはできる。どのように他の人が感じたのか感じることができる。そして理解することはできるはずです。我々には共感力があります。このような能力があるからこそ、文学にできることがあるのだと思います。誰かが文学を書いたときに、何が起こっているのか想像しなければいけない。１人の目ではなく、多くの人たちの心で想起できなければ成立しません。そういった意味で、本を読むことを通して我々は心を耕しているわけです。それがあるからこそ、経験したことがないものであっても、人がどう感じるかを想像できるようになるのだと思います。

○**堀まどか**　やはり擬人化やアレゴリー、見立てなど、そういったものは美術でも文学でもいろんなところにあるわけです。でも、やはりそこに、リアリティーを読み取ります。人を傷つけてはいけないとか、言ってはいけないことがあると思うと黙っていたりすることもありますけれど、誰かとコミュニケーションをして自分の言葉で語り合うというのは、とても大事なことと思います。それは文学と遠い話ではないと思いました。

○**奥野久美子**　ティアニー先生の佐藤春夫の作品の話を聴きながら考えていたのですが、現在の我々には検閲制度はなく、一見表現の自由があって、何でも語れるようですけれど、自己規制したり、忖度したりということで、佐藤春夫の時代とは違う意味で表現する上で不自由なのかもしれないと思いました。特にここ数年、ＳＮＳで叩かれるとか、炎上するといった現象もあり、自己規制をしていたり、息苦しい時代に生きてるような気がします。また、カテゴライズして核心を避けるなどといった無意識のうちにしている自己規制みたいなものを、意識的に解いていくことも必要なのかもしれないと思いました。

○**玉川侑香**　ティアニー先生が言われた想像力がとても大切だと思います。自分の経験から相手の経験も思い図るなど、そういうことも自分の文学へたどり着く１つの道かなと思います。リンダ先生の「日の鳥」は知りませんでしたので、新しいことを知った喜びといいますか、良いものを持って帰れそうです。ありがとうございます。

○**リンダ・フローレス**　先週、釜石を訪れました。釜石では、2019 年ラグビーワールドカップを開催するため、学校があった場所に釜石復興スタジアムを建築しています。これも記憶を語り継ぐものです。トラウマ的なことを忘却するのではなく、そこから回復するだけでもなく、将来を見据える。釜石の人たちが完全に元に戻ることはありません。その意味で記憶を持ちながらも、前に進めるとても良い例だと捉えています。

○**土山和久**　最後に会場からコメントをいただきます。

○**参加者３**　大変示唆に満ちたシンポジウムに参加できたことを、非常にうれしく思います。ありがとうございました。

　私自身、東北にも住んでおり、神戸の高校に通っておりましたので、恩師も友達も亡くしております。そういう意味で私は体験者だと思っております。最後のティアニー先生の、イマジネーションとシンパシーを語る上で文学は欠かせないという言葉に感銘を受けました。ありがとうございました。

○**西岡英子**　これにてパネルディスカッションを終了させていただきます。

閉会挨拶

大阪市立大学 男女共同参画担当 副学長　**池上　知子**

本日は、「文学の可能性」をテーマとしたシンポジウムを通じて、文学の力を改めて実感することができました。

「日の鳥」をテーマに、文学の可能性を考察されたリンダ先生の講演を聴かせていただき、日本の文化、芸術に深い関心を寄せ、熱く語ってくださる海外の方がいらっしゃることに感銘を受けるとともに、文学や芸術、学問は、国境を超えて我々人類をつないでくれるものであるという思いを強くしました。

また、私自身、心理学が専門ということもあり、シンポジウムの主要なモチーフである「記憶」は興味深いものがございました。心理学でも記憶の問題は非常に重要なトピックです。心理学はどちらかというと、人間の営みを客観的に、時にドライに見立てるところがあります。授業でも「人間は忘れっぽい生き物である。頭に入った情報を片端から忘れていく。けれども、忘れることには合理的な意味がある。忘れるのは必要でないから忘れるのであり、嫌なことを忘れるのは生きるうえでは良いこともある」と話しています。記憶を司る脳の機能がうまく働かなくなると、嫌なことばかりが思い出され、楽しいことが思い出せなくなるうつ病を発症することもあります。

一方で、忘れたといっても、決して記憶が消えたわけではありません。思い出さないように封印しているだけのこともあるのです。ふとしたきっかけで封印していた記憶が蘇ることもあります。また封印している記憶が心の病を引き起こすことも知られています。記憶が封印されるのは、それが耐え難い苦痛をもたらすからです。これを克服するには、セラピストなどの力を借りて、記憶を呼び戻し、それに直面する必要があります。今日、お話を聞きながら、人間の記憶のもつこうした性質について思い起こしていました。

被災経験にまつわる記憶は、辛く耐え難いために思い出したくないことが多いと思います。けれども、１人では思い出せないことでも、皆で力を合わせると思い出せることがあります。共同で思い出すことにどのような意味があるのでしょうか。それは、経験から学ぶことによって、個人を守り、個人が形成しているコミュニティーを守り、社会全体を守るためではないかと思います。だからこそ、その辛くて不幸な体験を、私たちは忘れてはならないのです。すぐには無理かもしれませんが、時機をみてそれを思い起こすという作業は、とても重要な営みだと感じました。それを可能にする、漫画、絵本、映画も含めた文学のもつ力は素晴らしいと思います。

以上、私の感想とご参加くださいました皆さまへのお礼を申し上げて、閉会のご挨拶とさせていただきます。本日は、どうもありがとうございました。

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」
2019 年度　第 1 回「研究発表交流会」
シンポジウム「文学の可能性 ―震災・移動・記憶―」報告書

発行日　2020 年 3 月
発　行　大阪市立大学　女性研究者支援室
連絡先　〒 558-8585　大阪市住吉区杉本 3-3-138
Tel：06-6605-3661
https://diversity-oows.jp/